

勝林寺報

お彼岸



夕焼け小焼けで 日が暮れて
山のお寺の鐘がなる
おててつないで みな帰えろ
鳥もいっしょに 帰りましょ

大正時代の中頃つくられたこの童謡は、約一世紀過ぎた今でも親から子へと歌い継がれています。

最近ある先生（出野義生）のお話によりますと、このうたは、単に今時の歌と言うよりも、ずっと古い昔からの日本民族の、願いというか祈りというか、また憧れというか夢というか、そんな永遠な郷愁・こころの古里を恋うる歌なんだということです。

たしかに賢いお坊さんや学者たちは、お釈迦さまの教えを伝え聞いたとき、その教えを、理論理屈として、哲学として取り入れました。がしかし反対に、日々の厳しい生活の中で、もがき苦しみ悩んでいた庶民たちは、お釈迦様の

「赤々と沈む夕日の彼方『お浄土』から、来いよと呼びたもう阿弥陀如来様を仰ぎましょ」いう『無量寿仏觀經』などのお諭しに救われて行つたのでした。

◇雀 雀 今日もまた

老人ボケ



定年退職して、しばらくは隣保長・区長・などを十年ばかり。それら役職を卒業した途端に今度は老人会の世話役をこれも六年させられました。ここのあるあたりで気が付いたことは、「老人ボケ」ということです。

父無し子の幼い私を、山深い祖父母の家に預け、そそくさと振り向きもせずに夕焼けのなかに去つて行った母の後ろ姿を私は今も思い出します。そして母が死んで七十年。歳がたつほどに、そのときの母親の切ない思いが偲ばれて参ります。

お浄土という世界は、あのシルクロードの時代。果てしない砂漠の砂嵐の道を勿論徒步で越えて行つたその苦難の人々が、砂漠に沈む夕日の彼方に見た永遠の救いの世界であつたのです。

また、夕日の彼方に阿弥陀さまを見る行事このお彼岸を、この日本に興された聖徳太子様。そのご生涯は言いようもなく悲惨なものでありました。氏族・親族間の骨肉の争い。その末、太子の血筋さえ絶えてしまふ悲惨な現実。そのなかで一世間は虚偽。唯仏の教えこそ真実」と、みんなして西方浄土をお定めくださったと申します。

現代は、豊かな飽食の時代です。なんの不足も不満もなく生活しております。がしかし、社会が進歩発展するにつれ、「人間の根源的な苦悩」は、深まっていくようと思われます。末法濁世・煩惱具足のわたし、そこから、彼の岸お浄土を仰ぎましょう。

九月二十三日 秋の彼岸会法要は午後2時からです。連れ立つてお参りください。

一

「ボケとか痴呆とか、まして恍惚の人なんて言わないのよ。認知症ってこのごろは言うの。でもこれも本当はヘンヨネー。痴呆であれボケであれそれをそのまま認めて認知してお互いいが尊重しあっているのです。」

二

「この看護婦さんがこの間、「ボケとか痴呆とか、まして恍惚の人なんて言わないのよ。認知症ってこのごろは言うの。でもこれも本当はヘンヨネー。痴呆であれボケであれそれをそのまま認めて認知してお互いいよと呼んでくださるのが私たちの如来様だつた。」

三

「今日の送迎バスでの帰りは、真っ赤な秋の夕日の中でした。だれもだれもボケも痴呆も足たたずも、みんな夕焼けに真っ赤に染まつて楽しく帰つて行きました。しあわせな一日でした。」

◇林の奥の竹やぶの 寂しい老家へ帰るのか
いいえ 皆さん あそこには 父さん母さん待つていて
楽しい老家があります
さよならみなさん チュツチュクチュ

考へて見ると、もうずっとずっと前から、このことは気になっていたことではあります。

十月

神無月 のこよみ

一日	老人健康促進講習会
二日	連研修了者大会
三日	眼科検診・あすなろ
四日	中島利一氏宅法事
五日	秋祭り
六日	岸下秀一氏宅法事
七日	山田まつゑ様忌明法事
八日	山陰某組住職会來訪
九日	日高別科・谷垣逸雄氏宅法事
十日	福社祭り準備
十一日	西宗寺報恩講
十二日	福社祭り準備
十三日	別科・谷垣薰氏宅法事
十四日	福社祭り準備
十五日	別科・谷垣薰氏宅法事
十六日	福社祭り・成田照夫氏宅法事
十七日	障害者福祉講演会
十八日	敬老報恩講舞台準備
十九日	西宗寺報恩講
二十日	福社祭り準備
二十一日	別科敬老報恩講
二十二日	代議員会
二十三日	善立寺報恩講
二十四日	善立寺報恩講
二十五日	善立寺報恩講
二十六日	善立寺報恩講
二十七日	善立寺報恩講
二十八日	善立寺報恩講
二十九日	善立寺報恩講
三十日	善立寺報恩講
三十一日	善立寺報恩講

八月二十九日 口小谷

山田 正規

葬儀



朗読ボランティアあすなろ（編集）

横山 誠氏宅法事

長專寺報恩講

高校P但馬地区大会

長專寺報恩講

別科

出石・みのりを聞く会

別科

朗読ボランティアあすなろ

（編集）



墓

暑い暑い夏がようやくおわって、朝夕涼風が立つようになりました。やっと秋です。私にとってこの夏は、お盆月ということともあつて墓・墓・墓に振りまわされた特別暑い夏がありました。

と言うのは、まず私の家の墓です。昨年

台風で山の立ち木が倒れかかって墓が壊されてしましました。まずこれを盆までに修復し

なければなりません。つぎにはやはり山墓ですが、私の家の親戚筋の墓も崩れています。

この墓は、いわゆる無縁墓といつていいほど

のもので、前からこの墓の身寄りの人は、

都會にてたまま音信不通。私の親は大変律義

なもので自分がいる墓よりも大切にお守り

してきましたといふ事もあるので、これもほつて

はおけません。一応修復しました。それか

ら次ぎは、家内の里の兄貴が死んで三年にな

ります。その息子は居るには居るのですが、

アメリカに永住してしまってこちらには帰つて来ません。せめて屋敷の中にでも新しい墓

をということで、其の方の世話を私が引き受けました。

そんなこんなで、もーこの夏の間は墓・墓

から人間は墓を作つて死者を葬つています。

人間が死者を墓に葬るには、いろいろな心理が働いているように思います。

NHKのシルクロードによると四千年前の昔

恐れ、それを避けるために遠くの山奥へ葬り閉じ込める。死者の寄り代としての墓を建てると思われます。

それとは反対に、死者を懐かしんで、そこへ行けば死んだ人にも合えるという感覚です。其のような気持ちが入り交じつて、昔から今まで墓というものが伝えられているのでしょうか。

私が死んだら、どうなのか。
墓に入りたいのか。どうしてほしいのか。
まず、葬式のやりかたも、墓のこと、子

や孫に任すのが一番いいと思います。一々そんなこと言い残すのは、浅ましい自分への囚われだと私は思っています。

親鸞聖人というかたは「私が目をつむつたら、加茂川にドブンとほかして魚の餌にでもしてください」と言い残されたと言います。

私たちの門徒では、だから死んだらその遺骨を親鸞様のお墓のある大谷本廟というところへ今でも納めるのだと聞いております。

最近、孫娘に教わった次の歌を、これがほんとだなーと心の中で反復味わっています。骨を親鸞様のお墓のある大谷本廟というところへ今でも納めるのだと聞いております。

親鸞聖人に教わった次の歌を、これがほんとだなーと心の中で反復味わっています。

親鸞聖人に教わった次の歌を、これがほんとだなーと心の中で反復味わっています。

あの戦中戦後の時代に、男女七人の子供を育て上げてきた私に取つて、「子育て」っていうことが、どれほど大変なことだということがよくよくわかつているつもりです。

また、子育て真っ盛り中の母親・父親の暮らし向きも、今は本当に厳しいこともよく存じているつもりです。

両親とも職場に出て、わずかな残り時間の中だけで子育てをしなければなりません。保育所にも義務教育にも昔とは比べようもないほどお金がかかるそうです。

そんなわけで、今はなんとか効率よく子育てをしなければならないのです。

学校も同じで、なるべく短期間に、無駄なことはやめて教育効果をあげなければと先生がたも懸命になつてくださっています。

これは時代ですから、こんな年寄りがあれこれいつても仕方のないことですが、しかし、私は、一つだけ気になつてゐることがあるのです。家中でもそうですが、いつでもどんなどきでも、親が王様です。おかあちゃんが、基準です。「おかあちゃんが○○といつたでしょ」「あかあちゃんはこれこれしどきななさいつていつたでしょ」

おかあちゃんは、いつも模範生、お手本、良い子なんです。このおかあちゃんのいうことを聞かない子はだから悪い子です。

こんな決めつけ方で子育てがされているようわたしには思えます。

私は育てられたのは日中戦争の前ですから古い古い親や、和服姿の先生に教わった時代です。でも、いまでも覚えているあの校長先生は、よくこのことばを言ひながら、子供の言い分に耳を傾けてくださいました

「人みな心あり。心おのの執るところあり。彼はなれば即ち我非ならん。われ是ならば即ち彼非ならん。我かならず聖なるにはあらず。彼かならずしも愚かなるにあらず。共にこれ凡夫のみ」(人はだれでも自分への執着と言うものがある。俺が私がという主張がぶつかり合うと戦争だ。平和に過ごそつと思

「子育て」

えば、それが、いい子悪い子で反発し合うのではなくて、みんなお互い欠点持つて悲しいお互いだと、互いに思いやることだ)

私の父は、この校長先生といいお友達だったので、父も同じことを言って私たちを育ててくれました。

この校長先生のおことばは聖徳太子さまの十七条憲法の教えって言つことでした。父はいつも「仏様は、いつでも、どこでも、誰でも、つらいだろうなー、悲しいだろうなー、こまつているのだねーと、なにおおいても、私のこころのうちを問い合わせてくださいました。

いまの子育てに、大事なものが欠けているよう思います。

私の父は、この校長先生といいお友達だったので、父も同じことを言って私たちを育ててくれました。

この校長先生のおことばは聖徳太子さまの十七条憲法の教えって言つことでした。父はいつも「仏様は、いつでも、どこでも、誰でも、つらいだろうなー、悲しいだろうなー、こまつているのだねーと、なにおおいても、私のこころのうちを問い合わせてくださいました。

いまの子育てに、大事なものが欠けているよう思います。

私の父は、この校長先生といいお友達だったので、父も同じことを言って私たちを育ててくれました。

この校長先生のおことばは聖徳太子さまの十七条憲法の教えって言つことでした。父はいつも「仏様は、いつでも、どこでも、誰でも、つらいだろうなー、悲しいだろうなー、こまつているのだねーと、なにおおいても、私のこころのうちを問い合わせてくださいました。

